岐阜県文化財保護センター調査報告書　第67集

中　山　道

（不破郡関ヶ原町大字野上字北整理地点の調査）

２００１

財団法人　岐阜県文化財保護センター

序

不破郡関ヶ原町野上は、北に相川が流れ南に南宮山がそびえる狭隘な地で交通の要衝に当たります。古代においては東山道が通り西に不破の関、東に美濃国府をひかえ、壬申の乱の行宮が設置されたといわれる重要な拠点です。また中世においても「野上宿」としてしばしば文学作品に登場しています。近世には中山道が通り、現在も沿道には松並木の一部が遺存し、関ヶ原町の天然記念物として保護されております。

今回の調査では、松並木が植えられていた盛土状遺構に続く道路の堆積の状態が明らかになりました。将軍の上洛や姫君の輿入れをはじめ、大名行列や朝鮮通信使などの通行に利用された中山道の築き方や道幅をうかがい知る上で貴重な資料となりました。

本報告書が刊行されるまでには、関ヶ原町教育委員会をはじめ関係諸機関並びに関係者各位、地元の皆様からの多大な御指導、御協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　服　部　卓　郎

例　　言

1　本書は、不破郡関ヶ原町大字野上字北整理に所在する中山道（岐阜県遺跡番号21362-08904）の発掘調査報告書である。

2　本調査は一般国道21号関ヶ原バイパス建設事業に伴うもので、建設省中部地方建設局（現国土交通省中部地方整備局）から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は平成12年度に実施し、浅野哲男が担当した。

4　本書の執筆は、浅野が担当した。

5　遺物の写真撮影は、フォトスタジオ　サトウに委託して行った。

6　空中写真測量は、㈱イビソクに委託して行った。

7　発掘調査および報告書の作成にあたって次の方々や諸機関から御助言・御指導をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

太田三郎・梶山　勝・中川尚子・長屋幸二・早川万年・渡辺博人・関ヶ原町教育委員会・関ヶ原町歴史民俗資料館・垂井町教育委員会

8　本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。

9　土及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1997『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

10　調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

序
例　言
目　次
第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過と方法……2

第２章　遺跡の環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の成果……6
　第１節　層位……6
　第２節　遺構……10
　第３節　遺物……14

第４章　まとめ……18
引用・参考文献……18
写真図版

挿　図　目　次

第１図　調査区の位置図……1
第２図　地区設定及び地形測量図……2
第３図　調査区周辺の遺跡地図……5
第４図　調査区土層図(1)……7
第５図　調査区土層図(2)……9
第６図　遺構配置図……11
第７図　土坑……13
第８図　出土遺物(1)……15
第９図　出土遺物(2)……16
第10図　調査区周辺の地籍図……18

表　目　次

第１表　中山道における姫君の下向……4
第２表　明治末期、大正、昭和の県下の諸車の保有台数……4
第３表　調査区周辺の遺跡一覧表……5
第４表　調査区の堆積土層一覧表……6
第５表　その他の出土遺物集計表……16
第６表　遺物観察表……17

写真図版目次

図版０　昭和35年当時の調査区風景
図版１　調査前風景・調査区遠景
図版２　調査区全景完掘状況、SK１・２
図版３　SK３・４・５、遺物出土状況
図版４　北壁セクション
図版５　西壁セクション
図版６　出土遺物

第１章　調 査 の 経 緯

第１節　調査に至る経緯

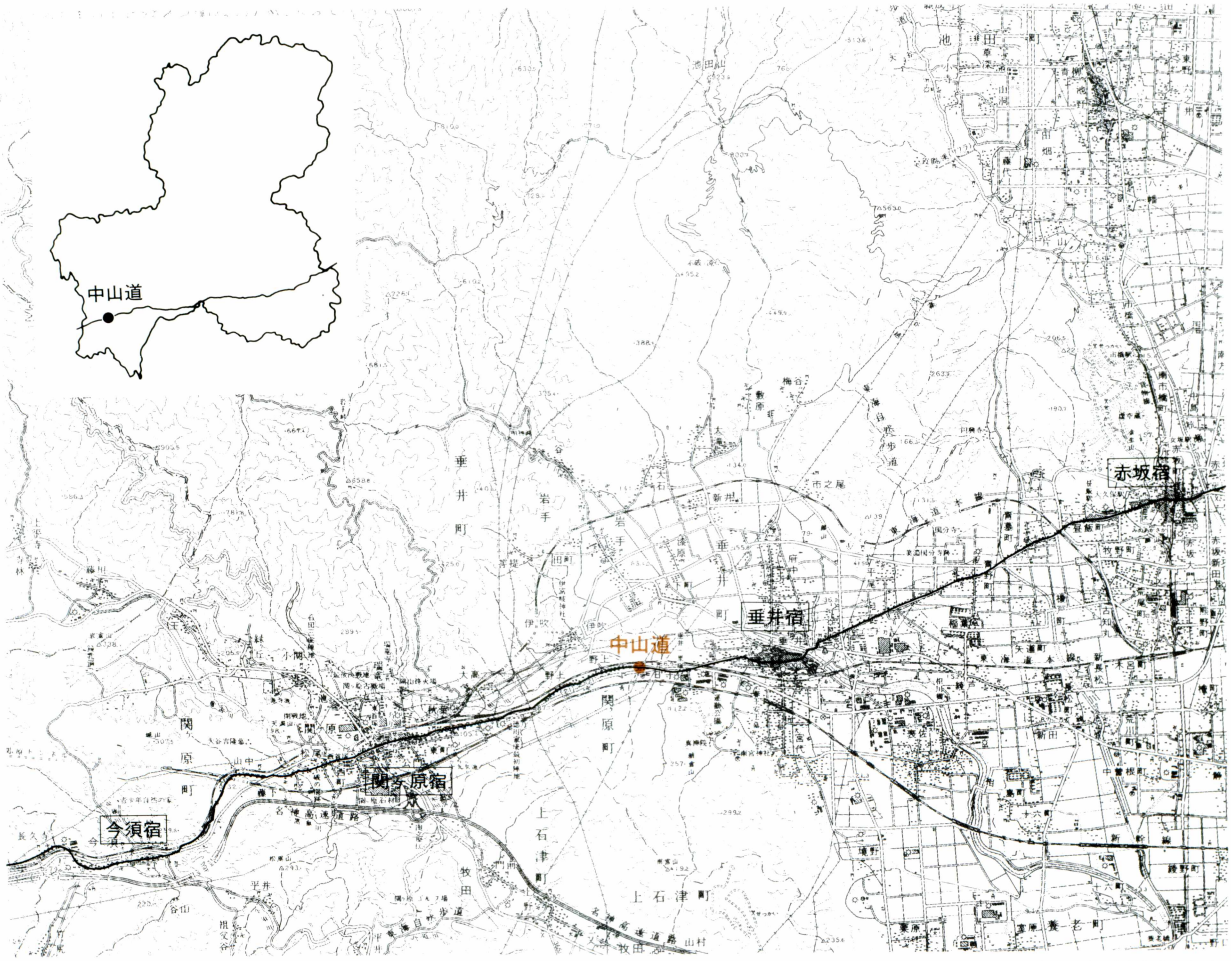
本遺跡は、不破郡関ヶ原町大字野上字北整理に位置し、南整理遺跡の北側に隣接する。

建設省中部地方建設局（現国土交通省中部地方整備局）岐阜国道工事事務所による一般国道21号関ヶ原バイパスの建設事業に伴い、影響が及ぶ範囲の調査について、中部地方建設局（現中部地方整備局）から岐阜県教育委員会を通じて委託を受けた。

当センターでは平成７年度に対象区間の試掘確認調査を実施し（本遺跡部分は町道として利用していたため実施せず）、その結果に基づき平成９・10年度には南整理遺跡の発掘調査を実施した。南整理遺跡では、古代から中世の掘立柱建物跡をはじめ多数の柱穴・土坑・溝及び中山道に伴う盛土状遺構・積石遺構などを検出し、須恵器・土師器・灰釉陶器・中近世陶磁器などの遺物を発見した。

本遺跡は、南整理遺跡で検出された盛土状遺構に続く旧中山道の遺構が残っていると考えられ、調査が終了した南整理遺跡側に付け替え道路を建設し、平成12年度に発掘調査を実施した。

なお、本遺跡は街道跡の一部分に過ぎないが、中山道と称し、『中山道（不破郡関ヶ原町大字野上字北整理地点の調査）』として報告する。



国土地理院発行１：50,000地形図（長浜）（大垣）より

第１図　調査区の位置図（Ｓ＝1/100,000）

第２節　発掘調査の経過と方法

発掘調査は、７月下旬に町道の付け替え道路の建設が終了した後、第２図に示す部分の300㎡（道路の両側の側溝部を含む）を対象に行った。調査区内は磁北を基準とした設定は困難であったため、調査区の東西に沿った任意の軸と、道路断面が直交するように８ｍ×８ｍの区画を設定し、西から東へ１～９、北から南へＡ～Ｄとし、北西角の杭番号により呼称した。

調査は、まず重機によって道路の両側に敷設された（昭和49～50年）側溝及び道路部上面のアスファルト舗装・路盤を除去した。この道路は国道21号線が建設されるまでは東西を結ぶ幹線道路として使用されていたため、幾重にも舗装され地表面より路盤までは約30cmにも及んだ。路盤は固く踏み締められ、その下の遺構面にも砕石がめり込み、平面の精査は困難を極めた。また、周知のＮＴＴ地下埋設ケーブルの他にも、道路中央より北には３本のケーブルが埋設され、南側側溝に沿っては水道管が敷設され（昭和57年）撹乱を受けていた。遺構面はその間に残るといった状態であった。

その後、道路の断ち割りを６箇所について行い、遺構及び遺構面を検出した。道路北西端からは、擂鉢や壺の一部がまとまって出土した。９月初旬に空中写真撮影を行い調査を終了した。調査体制を以下に記す。

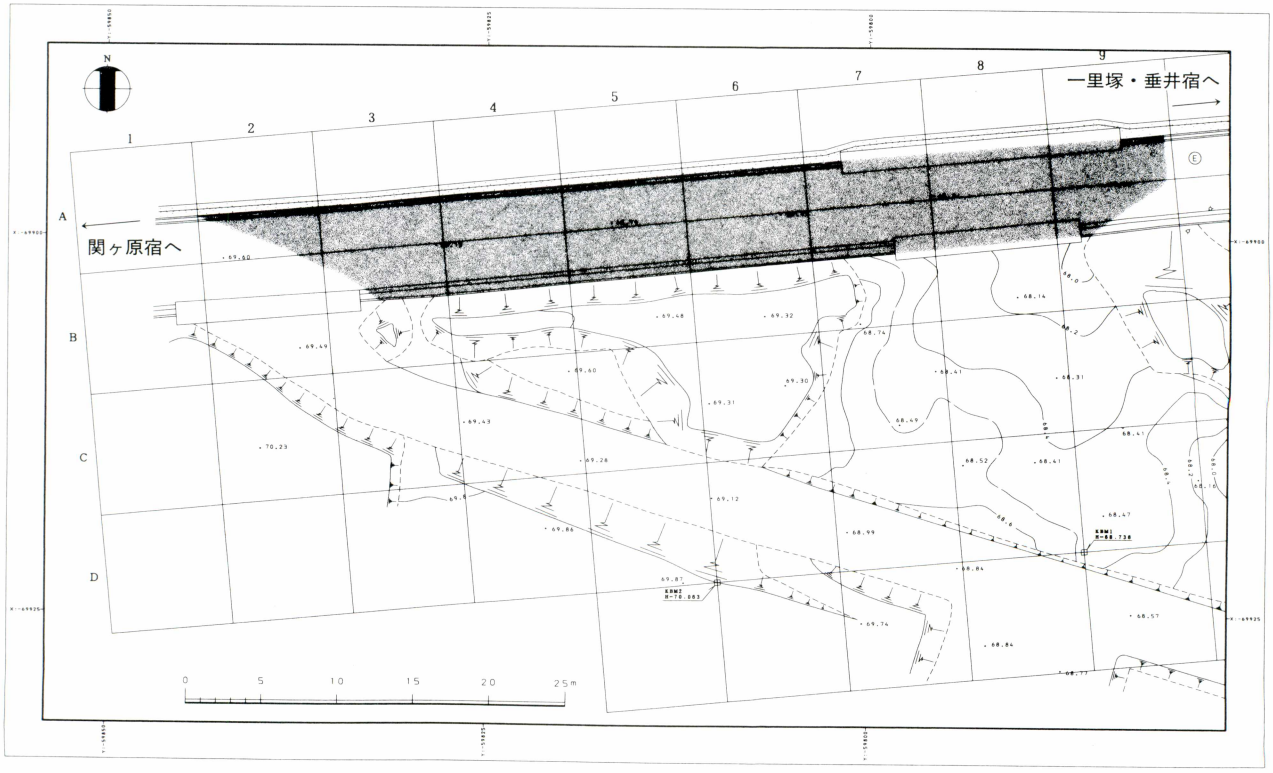
（財）岐阜県文化財保護センター調査体制

調査部長　　高橋幸仁　　調査部次長　武藤貞昭

担当調査課長　柘植卓伸　　担当調査員　浅野哲男

発掘作業員　大本直人・川瀬昌彦・斉藤弥生・杉山忠弘・内藤知恵・林由佳子・松井豊彦・松井久美

整理作業員　小澤真紀子・國井悦子・薮下賀代子　　（五十音順）



第２図　地区設定及び地形測量図（南整理遺跡発掘調査前の地形）（Ｓ＝1/500）

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

不破郡関ヶ原町野上は、北に伊吹山地の支脈である相川山地、南に鈴鹿山地の北端となる南宮山によって囲まれた狭隘の地に位置し、現在町の中央部を東西の方向にJR東海道線・JR東海道新幹線・名神高速道路・国道21号線が並行して走る交通の要衝に当たる。

第四紀更新世に伊吹山地から南流する藤古川・梨の木川・相川の活動によって発達した旧扇状地は、隆起と浸食を繰り返しながら関ヶ原台地を形成した。この台地は、上位面・下位上段面・下位面に分類されているが、下位面を浸食して谷底平野を形成する相川には南宮山塊から一の谷川・西谷川・堂谷川・平木川・不帰川（かえらず）などが流下する。本遺跡はこのうちの不帰川の左岸に位置し、南西から北東に緩やかに傾斜している。

遺跡周辺の現代の土地利用をみると、住宅地と畑地が多く水田は比較的少ない。水田は利水環境に恵まれたわずかな谷底平野に多く、扇状地や台地上では、マンボと呼ばれる地下トンネルや貯水池などの灌漑施設が必要となる。明治～大正時代には開墾が進み水田を営む場合もみられるが、桑畑や茶畑が多い。

第2節　歴史的環境

本遺跡周辺には周知の遺跡が数多く点在する（第３図、第３表）。既に隣接する南整理遺跡発掘調査報告書において詳細が述べられているので重複は避け、主に中山道に関わる内容に絞って記述する。

中世において、野上宿・垂井宿が宿駅として繁栄したが、その後近世に入ると中山道が整備された。中山道は江戸日本橋を出発して、板橋宿から守山宿までに67の宿駅がおかれた。このうち美濃国には16の宿駅が設けられた。美濃国を東西に横断する中山道は、中山道と東海道を結ぶ美濃路が垂井から大垣・墨俣などを経て名古屋へ通じ、また、関ヶ原から長浜にいたる北国街道、米原と朝妻湊と揖斐川の三湊（烏江・舟付・栗笠）を結ぶ九里半街道、関ヶ原より牧田・多良・時を経て桑名へ出る伊勢街道など、多くの脇街道と繋がっている。このように美濃における中山道は、その多くの脇街道とともに太平洋側と日本海側を結んでおり、政治・軍事・経済上の重要性ははかり知れないものがあった。

幕府は、主な街道に一里塚を設けて通行人に里程を知らしめ、人夫や馬を貸す者には、里程を知って賃金を一定せしめた。美濃16宿の間には、一里塚が32箇所（注1）あったが、そのほとんどが滅失し数箇所残るのみである。調査地から不帰川を挟んだ垂井町側には、垂井（日守）の一里塚が現存している。この一里塚は当時の面影をよくとどめ国の史跡にも指定されている。

また、街道の松並木は、旅人にとっては日陰にもなり休息場所としての役割も果たしてきた。現在では数少なくなり、調査区から野上の集落にかけての松並木は、天然記念物として町の指定を受け厚く保護されている。

（注１）『歴史の道　中山道調査報告書』より

垂井（日守）の一里塚

こうした中山道にはいろいろな通行があったと記録に残っている。中山道が大通行に利用されたのは、将軍の上洛の往復・日光例幣使・姫君の輿入れ・お茶壺道中・大名行列・朝鮮通信使・琉球使節の通行などである。江戸時代の将軍の上洛は慶長10年（1605）２月、徳川家康が将軍職を秀忠に譲る勅許を得るためのものが最初である。将軍の上洛は家康が２回、秀忠が６回、家光が３回行ったが、以後文久３年（1863）家茂が上洛するまでは中断する。その他多くの大名行列が行われたが、注目すべき点は姫君の通行である。輿入れに中山道が利用されたのは、東海道が交通量が多く、川止めの心配もあり、また駿河国には「薩埵峠」や「縁切坂」といった縁起の悪い地名があり、避けた結果であろうと言われている。姫君の輿入れは政策的な結婚であったため華やかで賑々しい通行になった。そのため幕府は前年から各宿駅に通達して準備させた。主な姫君の通行は第１表（注1）のとおりである。

第１表　中山道における姫君の下向

姫	父	配偶者	入輿年月
比　姫	伏見宮邦永親王	徳川家重	享保16年８月
五十姫	閑院宮直仁親王	徳川家治	寛延２年３月
楽　姫	有栖川宮熾仁親王	徳川家慶	文化元年９月
登美姫	同	徳川斉昭	天保２年２月
有　姫	鷹司政熙	徳川家定	同　９月
寿明姫	一条忠良	同	嘉永２年９月
和　姫	仁孝天皇	徳川家茂	文久元年10月

有姫の下向を一例とすると、幕府は道中の検分を行い、沿道の各藩に警備を命じた。普請奉行・破損奉行・横目が道中をきめ細かく調査し、例えば揖斐川の呂久の渡しでは、船着場、御墓場を調べ、大島堤防の修理と幅七尺、厚さ四寸の敷砂を命じた。街道は九尺幅のかまぼこ型に築き、並木の枯松は根から切り、街道へ出ている枝を払い、間があいていたら松を植えさせるなどきめ細かく注意事項を大垣藩郡奉行が代官に命じている。また、荷物の輸送などには多く近隣の村へ助郷が命じられ、沿道の大名や住民・宿駅は多大な額の経費と労役を負担することになった。

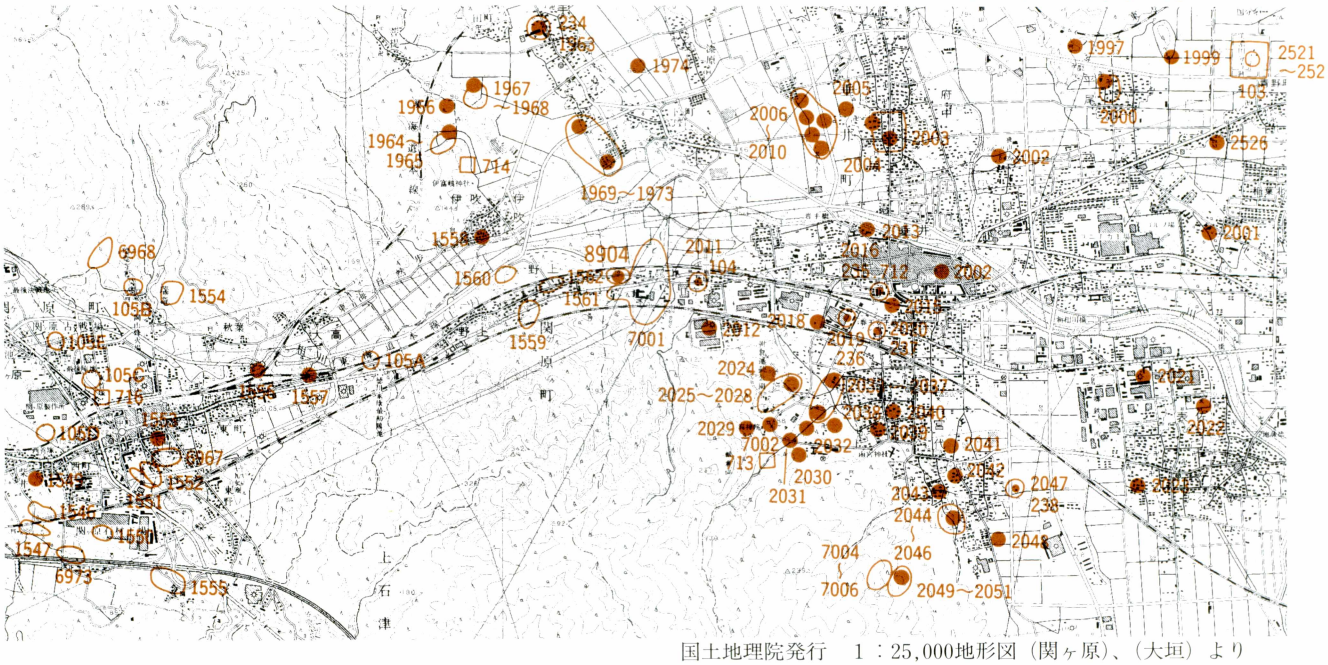
また五街道で初めて板車（大八車）の使用が認められたのは、垂井宿と今須宿においてである。急流な河川も多く、橋の流失など自然条件が悪いという理由もあったが、幕府は人馬による継ぎ立てを主とした宿駅制度を維持するため、主要街道での車の使用は制限していた。ところが、幕末になると、商品作物や特産品の流通が活発になり、従来の人や馬での運搬では消化できず、宿駅が荷車の使用を願い出ることになった。弘化３年（1846）のことである。板車は、道路を傷めるということもあったが、傷めば自分たちで修復し、橋のない川には新規に車橋を架けることにした。その結果、嘉永２年（1849）大垣藩預役所は板車の使用を許可したのである。関ヶ原は中山道より北国街道と伊勢街道の分岐点でもあり、旅人の宿泊も多く旅篭屋は12軒の大旅篭を含む33軒（注2）とあり、交通量が多かったことを示している。

このような背景があってか、明治６年には垂井宿にて人力車営業が行われている。比較的人力車が集中していたのは岐阜・大垣を始めとする中西濃の中山道沿いの地域である。県内の自動車保有台数は第２表（注3）のとおりで、荷物自動車は大正元年から、乗用自動車は大正10年からで、昭和初期に爆発的に台数が増加する。これにより道路の整備が本格化する。関ヶ原においてアスファルト舗装が施工されたのは戦後で、それまでは砂利道であった。調査地あたりの中山道は、東西物資輸送のいわば大動脈であったのである。

第２表　明治末期、大正、昭和の県下の諸車の保有台数

		荷物自動車	乗用自動車	自転車	牛馬荷車	人力車	馬車
明治	40		—	—	9,748	2,542	63
	41		—	—	3,961	2,575	61
	42		—	5,238	4,948	2,525	75
	43			7,263	4,667	2,479	60
	44			10,975	4,836	2,404	82
大正	元	5		13,407	4,723	2,189	60
	2	6		16,866	4,806	2,038	47
	3	7		18,537	4,743	1,883	44
	4	5		20,785	4,733	1,840	39
	5	15		24,966	5,099	1,801	40
	10	18	91	61,211	6,286	1,515	17
	14	27	112	92,527	6,504	1,306	3
昭和	元	100	226	98,414	6,234	1,095	2
	3	222	384	112,944	5,841	901	1
	5	445	607	121,337	6,190	660	1
	10	946	889	156,150	4,796	260	0
	14	不詳	不詳	180,793	4,034	137	0

（注１）『垂井町史通史編近世』より　（注２）『天保14年中山道宿村大概帳』より　（注３）『岐阜県道路史』より



国土地理院発行　１：25,000地形図（関ヶ原）、（大垣）より

第３図　調査区周辺の遺跡地図（Ｓ＝1/50,000）

第３表　調査区周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1562	南整理遺跡	縄文～近世	2014	長屋氏屋敷跡	鎌倉・室町
1551，1552	中野Ａ地点遺跡、Ｂ地点遺跡	縄文	2015	郷学泗水庵跡	近世（江戸）
1553	関ヶ原与市墓	中世(鎌倉)	2016	垂井の泉	
1554	大栗毛遺跡	縄文	2017	紙屋塚	奈良・平安
1556	森前遺跡	縄文	2018	金蓮寺跡	鎌倉・室町
1557	池下遺跡	縄文	2019	春王安王の墓	室町
1558	堂ヶ谷遺跡	縄文	2020	宮処寺跡	白鳳～奈良
1559	南方遺跡	縄文～平安	2024	朝倉グランド遺跡	奈良・平安
1560	溝畦遺跡	縄文～平安	2025～2028	朝倉１号古墳～４号古墳	古墳
1561	天楽遺跡	縄文～平安	2029	真禅院遺跡	奈良・平安
1964，1965	伊富岐神社１号経塚、２号経塚	平安	2030	宮代遺跡	奈良・平安
1966	長尾遺跡	縄文～平安	2031	隣松寺古墳	古墳
1967，1968	長尾１号古墳、２号古墳	古墳	2032	よろい塚古墳	古墳
1969～1973	長畑１号古墳～５号古墳	古墳	2033～2037	中屋敷１号古墳～５号古墳	古墳
1974	乙井古墳	古墳	2038	兜塚古墳	古墳
2000	国分尼寺跡	奈良	2039	南宮神社神宮寺跡	近世（江戸）
2002	葬送山古墳	古墳	2040	最勝寺観音堂	安土桃山・江戸
2003	美濃国府跡推定地	奈良	2041	大領神社北古墳	古墳
2004	民安寺跡	平安	2042	大領神社古墳	古墳
2005	国府土塁跡	奈良	2043	森上古墳	古墳
2006	忍勝寺古墳	古墳	2044～2046	杉ノ本１号古墳～３号古墳	古墳
2007	若宮古墳	古墳	2047	宮代廃寺跡	白鳳～奈良
2008	こがね古墳	古墳	2048	谷の舞古墳	古墳
2009	赤辺古墳	古墳	6967	南野遺跡	縄文～平安
2010	新井中根古墳	古墳	7001	日守遺跡	縄文・平安・奈良
2011	垂井一里塚	近世(江戸)	7002	朝倉遺跡	縄文～弥生
2012	日守塚古墳	古墳	8904	中山道	近世（江戸）
2013	法華塚	中世(室町)			

第３章　調 査 の 成 果

第１節　層　　位

本遺跡は、中山道として使用された後、県道・町道として何度となく舗装が積み重ねられた。道路中央より北にはＮＴＴの地下埋設管等の設置で撹乱を受けている。また、調査区南西より北東にかけての緩やかな傾斜に沿って氾濫した河川の爪痕も残されている。そのため調査区内の土層は複雑で断ち割り場所によって違いが見られるが、基本的に次のように分層できる。

Ⅰ層－近現代の補修及び舗装の砕石・路盤

Ⅱ層－盛土状遺構に関わる土

Ⅲ層－硬化層（Ⅲ層の上面が遺構検出面）

Ⅳ層－整地層（中山道以前）

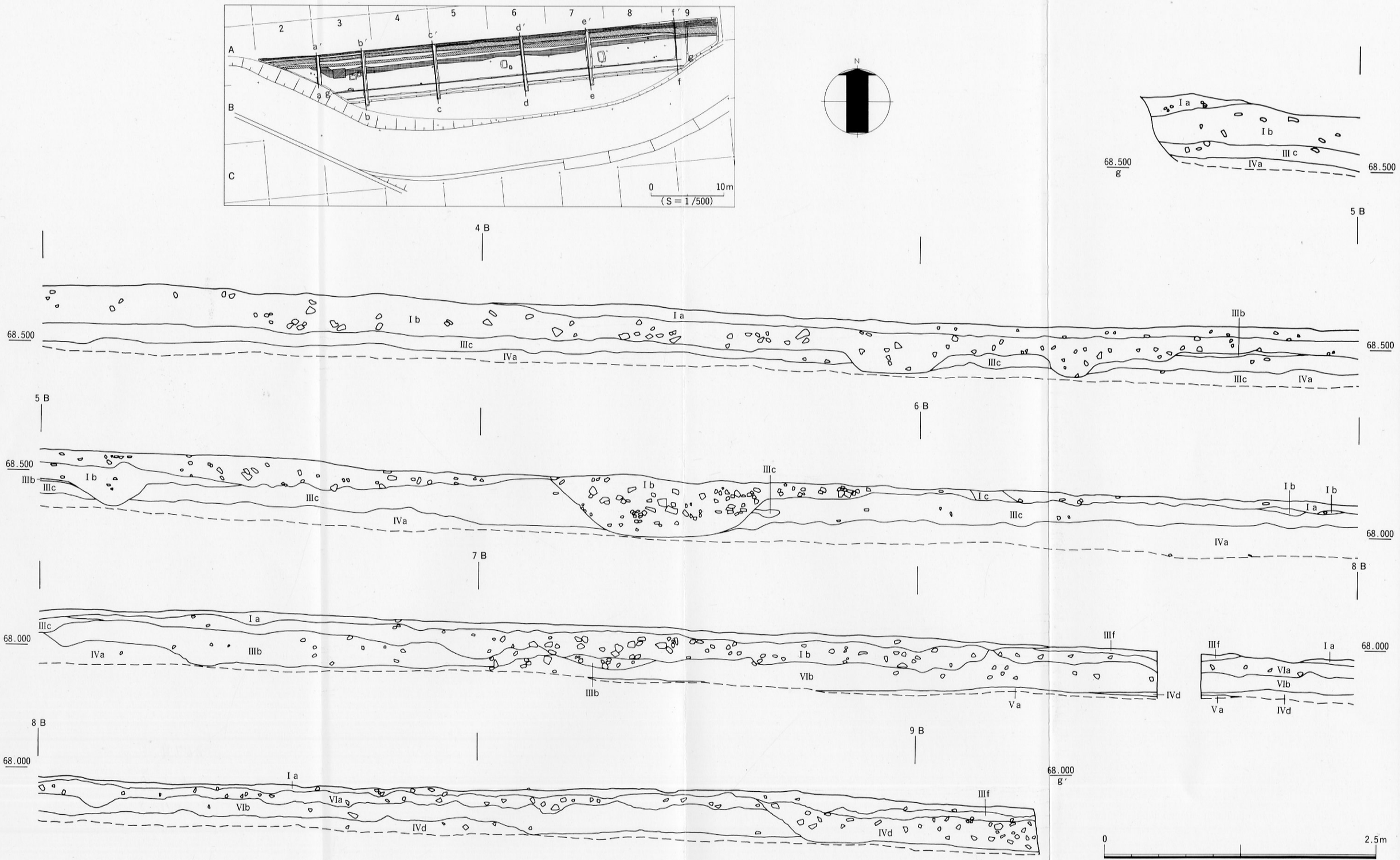
Ⅴ層－地山

Ⅵ層－硬化面形成以前の河川氾濫による堆積層

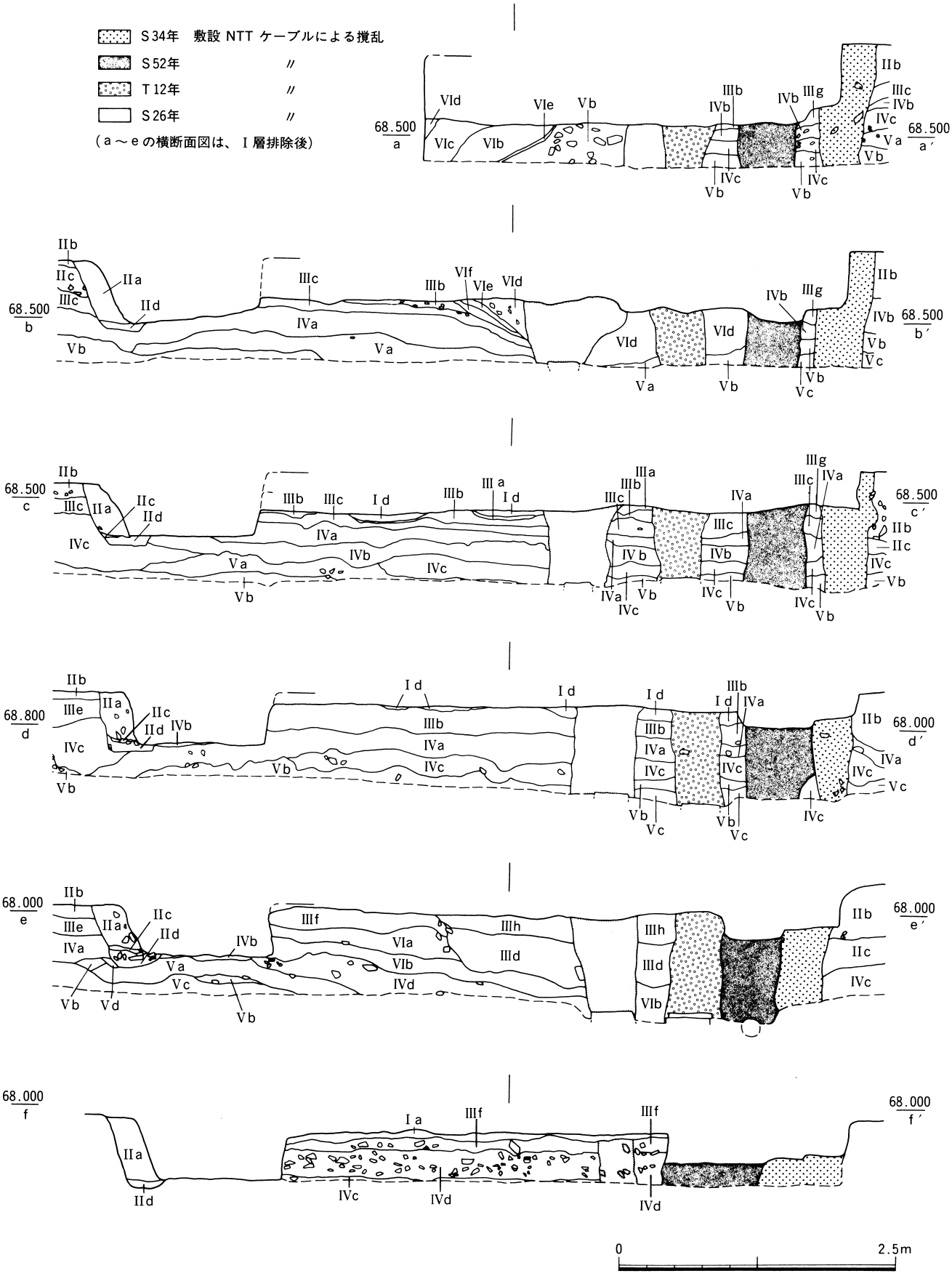
以下に土層について記す。

第４表　調査区の堆積土層一覧表

記号	JIS notation	土色名	土質	礫の混入	しまり具合
Ⅰa	7.5Y(6/1)	灰色土	粘質なし	多　径１～５㎝の円　礫角礫は含まず、砂質層で砕石下に敷いたものと考えられる	しまりなし
Ⅰb	10YR(2/2)	黒褐色土	粘質あり	多　径２～８㎝の亜角礫・角礫　大きな礫の間に小さな礫が混入	しまりあり
Ⅰc	10YR(4/4)	褐色土	粘質あり	多　径２～８㎝の亜円礫・亜角礫	固くしまる
Ⅰd	10YR(6/8)	明黄褐色土	粘質あり	多　径２～５㎝の円礫	固くしまる
Ⅱa	10YR(3/3)	暗褐色土	粘質ややあり	多　径３～５㎝の亜角礫	しまりなし
Ⅱb	10YR(3/1)	黒褐色土	粘質ややあり	少　径１～２㎝の亜円礫	ややしまりあり
Ⅱc	10YR(3/1)	黒褐色土	粘質ややあり	多　径２～10㎝の亜円礫	ややしまりあり
Ⅱd	10YR(3/2)	黒褐色土	粘質あり	多　径２～４㎝の亜円礫	ややしまりあり
Ⅲa	10YR(5/3)	にぶい黄褐色土	粘質なし	砂質層　道路中央部付近に幅約１ｍ程のみ残る　礫は含まれない	固くしまる(硬化層)
Ⅲb	10YR(5/3)	にぶい黄褐色土	粘質なし	少　砂質層　径0.5～0.8㎝の亜円礫	固くしまる(硬化層)
Ⅲc	10YR(5/4)	にぶい黄褐色土	粘質ややあり	砂質層　極少　径0.8㎝程の砂岩	固くしまる(硬化層)
Ⅲd	10YR(3/3)	暗褐色土	粘質なし	多　径１～３㎝の亜円礫　径５～８㎝の亜角礫　大きさの違う礫が混ざるが亜角礫の礫の間に小石が混入	ややしまりあり
Ⅲe	10YR(4/4)	褐色土	粘質ややあり	多　径１～３㎝の亜円礫	しまりあり
Ⅲf	10YR(2/2)	黒褐色土	粘質ややあり	少　径１～３㎝の亜角礫　砂を少量含む	しまりあり
Ⅲg	10YR(5/2)	灰黄褐色土	粘質あり	礫は含まない	しまりあり
Ⅲh	10YR(1.7/1)	黒色土	粘質なし	少　径２～８㎝の亜角礫　大きな礫の間に小さな礫が混入	しまりあり
Ⅳa	10YR(3/3)	暗褐色土	粘質あり	多　径0.5～２㎝の砂岩礫　均一に混じる	しまりあり
Ⅳb	10YR(2/2)	黒褐色土	粘質あり	多　径0.5～2.5㎝の砂岩礫　均一に混じる	しまりあり
Ⅳc	10YR(3/2)	黒褐色土	粘質あり	Ⅳbに比べ少　径１～1.5㎝の砂岩礫	ややしまりなし
Ⅳd	10YR(5/6)	黄褐色土	粘質なし	多　径３～10㎝の亜角礫・亜鉛礫　砂混入　円礫と角礫が混在する	ややしまりあり
Ⅴa	10YR(2/3)	黒褐色土	粘質ややあり	少　径５～７㎝の亜角礫	ややしまりあり
Ⅴb	10YR(4/2)	灰黄褐色土	粘質ややなし	多　径５～10㎝の角礫	しまりあり
Ⅴc	10YR(4/3)	にぶい黄褐色土	粘質ややあり	少　径0.5～１㎝の亜円礫	ややしまりあり
Ⅴd	10YR(6/6)	明黄褐色土	粘質なし	少　径２～７㎝の亜角礫	ややしまりなし
Ⅵa	10YR(4/4)	褐色土	粘質ややあり	少　径１～２㎝の亜円礫　自然堆積	ややしまりなし
Ⅵb	10YR(4/6)	褐色土	粘質ややあり	少　径１～1.5㎝の亜円礫　砂質で北側へいく程下がる	ややしまりあり
Ⅵc	2.5YR(4/4)	オリーブ褐色土	粘質ややあり	多　径２～５㎝の亜角礫を多く含む	ややしまりあり
Ⅵd	10YR(6/6)	明黄褐色	粘質ややあり	少　砂質層	ややしまりあり
Ⅵe	10YR(5/6)	黄褐色土	粘質ややあり	少　砂質層	しまりあり
Ⅵf	10YR(3/5)	にぶい黄褐色土	粘質なし	少　砂質層	ややしまりあり


2
3
4
5
6
7
8
9
A
B
C
a′
b′
c′
d′
e′
f′
g′
a
b
c
d
e
f
g
0
10m
(S＝1/500)
N
Ia
Ib
IIIc
IVa
68.500
g
68.500
5 B
4 B
IIIb
68.500
68.500
5 B
6 B
68.500
IIIb
IIIc
Ib
IIIc
IVa
IIIc
Ib
IIIc
Ic
IIIc
Ib
Ib
Ia
IVa
68.000
7 B
8 B
IIIc
Ia
68.000
IVa
IIIb
Ib
VIb
IIIb
IIIf
IVd
Va
IIIf
Ia
68.000
VIa
VIb
Va
IVd
8 B
9 B
68.000
Ia
VIa
VIb
IVd
IIIf
IVd
68.000
g′
0
2.5m

第４図　調査区土層図(1)



第5図　調査区土層図(2)（S＝1/50）

IVa・IVb は径0.5～２㎝の砂岩粒が均一に混じり、中山道が作られる以前に南西から北東にかけての緩やかな傾斜を埋めるために入れられた整地のための層と判断した。また、４～７列にかけては安定した土層が見られるが、７列から９列にかけては、南整理遺跡調査区のほぼ中央を北東に向かって埋める河川氾濫による円礫・亜円礫混入土を利用して整地した層と見られる。VI層は自然流路に伴う埋没土と考えられ、南整理遺跡調査区の西端に検出された流路の続きと考えられる。

第２節　遺　　構

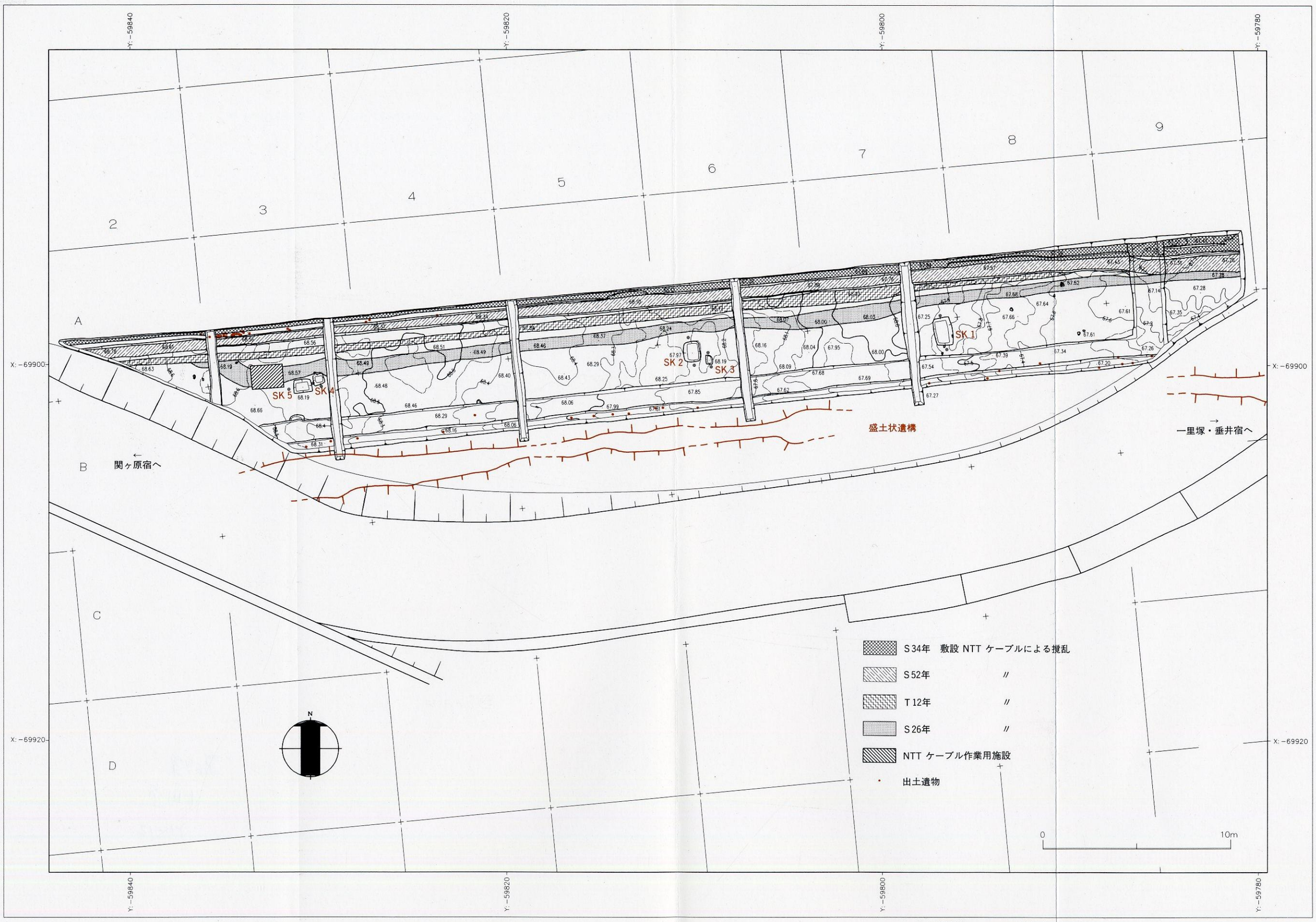
近現代の舗装を除去した下には川原石が多く混入した砂質層（Ｉa）があり、そこには現代の鉄釘やガラス瓶といったものが混入していた。さらにその下には、調査区より５㎞東方に位置する赤坂の金生山の石灰岩と思われる砕石混じりの黒褐色土層（Ｉb）が厚く路面を覆っていた。この層上面はほぼ水平で、非常に固くしまっていた。また、アスファルト舗装がされる前は自動車が通るたびにひどい砂塵が舞い上がったという野上村の古老の話から類推すると、おそらくアスファルト舗装が施工される以前に使用されていた路面ではないかと考えられる。

さて、中山道はこのＩb 層下のIII層であると考えられる。遺構面と判断した理由として、III層上面はＩb ほどではないが固くしまっていたことがあげられる。それに対しIV層はIII層のようなしまりはなく、前述したようにこの層は広く南整理遺跡にまで続く整地した土であると考えられる。加えてIII層上面の調査区北西隅にて、近世の遺物が出土したこともその理由の一つである。これらから中山道は、整地されたIV層の上に粘土質及び砂質の盛土を行い路面を形成したと考えられる。検出した硬化層の上面はほぼ水平で、粘土質のIII層の厚さは約20㎝を測る。硬化面は路面上ほぼ全域で確認されたが、道路幅の中でどのあたりがさらに固いとは言い難い。c－c’間では道路中央付近に均質の砂質の層が三層重なり、補修を重ねたことが想像される。この層の一つには近世の大通行に伴い置かれた敷砂も含まれている可能性がある。

こうした遺構面には、平面が方形・隅丸方形・隅丸長方形の土坑が検出された。土坑内には３～20㎝の亜角礫が隙間なく充塡されていた。礫間は砂が混入していたが、道路硬化面と同様に固く締まっていた。一部路盤の除去とともに遺構の上面の礫を除去したが、掘り方の上端まで礫が混入していたと考えられる。これらの土坑は、道路のほぼ中央に３箇所に分かれて位置し、10～15ｍの間隔がある。また、遺構の長軸は道路に直交するものが多く、SK１以外は二つずつ並んでいる。土坑底部は混入された礫が突き刺さらないほど固く、南整理遺跡で見られた道路状遺構２に類する遺構ではないかと考える。

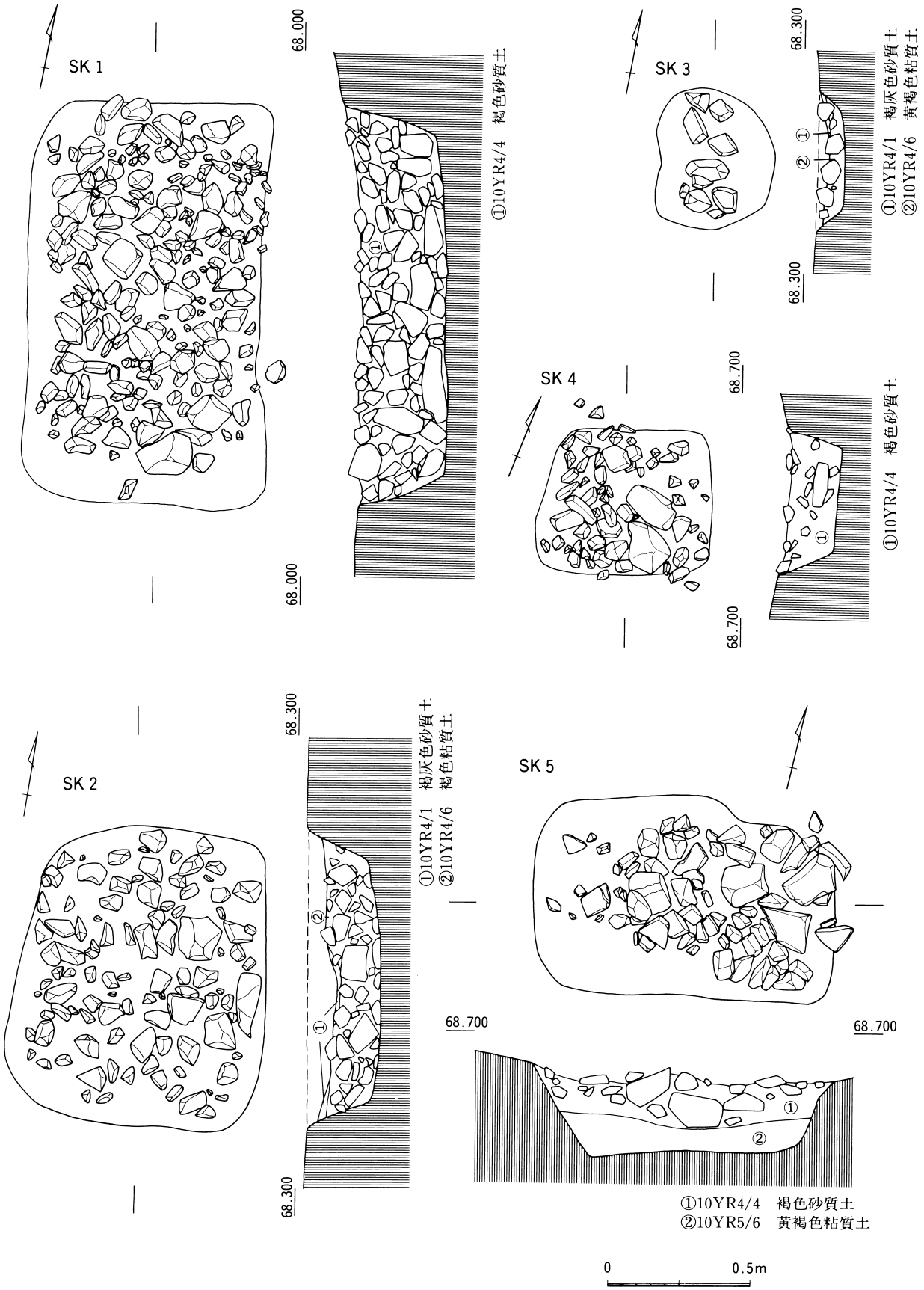
これらの土坑は遺構面に掘り込まれてはいるものの、街道の一機能を果たすものとは考えにくく、遺物も１点も出土しなかったため、いつの時代のものなのか時期の特定が困難である。今後の類例を待ちたい。

また、調査区北西隅において、幕末から明治時代初頭と思われる擂鉢や壺がまとまって出土した。NTT 地下埋設管設置のための撹乱層の間に残った粘土層より出土したが、遺構とは考えにくく、その出土状況だけ写真で記録した。（写真図版３）



1）盛土状遺構については岐阜県文化財保護センター2000『南整理遺跡』により合成した

第6図　遺構配置図（S＝1/200）


SK 1
68.000
①10YR4/4　褐色砂質土
SK 2
68.300
①10YR4/1　褐灰色砂質土
②10YR4/6　褐色粘質土
SK 3
68.300
①10YR4/1　褐灰色砂質土
②10YR4/6　黄褐色粘質土
SK 4
68.700
①10YR4/4　褐色砂質土
SK 5
68.700
①10YR4/4　褐色砂質土
②10YR5/6　黄褐色粘質土
0
0.5m

第7図　土坑（S＝1/20）

第３節　遺　　物

包含層出土遺物の総数は、101点である。各遺物の説明については種類別に略述し、詳細は観察表を参照されたい（第６表）。

須恵器甕（第８図１　図版６）

１は、薄手の甕の胴部と思われる。外面は平行叩き、内面は同心円状当て具痕が残る。

山茶碗（第８図２～４　図版６）

すべて荒肌手で南部系である。３・４は、貼り付け高台に籾殻痕が残る。

皿（第８図５～７　図版６）

５は、南整理遺跡出土遺物との関連から、15世紀の古瀬戸の卸目付大皿または直縁大皿の底部と考えられる。６は、連房の折縁皿である。口縁内部に２条の凹みを有し、全面に灰釉が施されている。

茶碗（第８図８　図版６）

８は、磁器の茶碗で、体部は直線的にのび、口縁部は外反気味である。

湯呑（第８図９～12　図版６）

10は、肥前の湯呑と思われる。11は、外面に回転施文具により連続模様が施される。施文の幅は一定せず平行ではない。

瓶・徳利（第８図13～16　図版６）

13は、頸部が細長く口縁端部はやや外反する。15・16は、胴部が太く肩が張る。

土瓶（第８図17～19　図版６）

17と18は、蓋と身のセットで出土した陶器の土瓶である。18は、算盤玉形で胴部上方は丸味を帯びるが、下方は直線的に開き、外面に炭化物が付着していた。

つまみ（第８図20　図版６）

20は、上部に三方からの指圧痕を有する。

玩具類（第８図21　図版６）

21は、磁器で狐または犬をかたどったものと思われる。

擂鉢・鉢（第９図22～24　図版６）

22は、擂鉢である。回転ヘラ削り痕が底部から体部中程外面に施され、体部は開き気味に立ち上がる。擂目は、１単位が23条で幅５cmを測る。底部内面の擂目は周縁に円状に施された後、円内部に不定方向に４方向から施される。23は捏鉢で、体部はやや丸みをもって立ち上がり端部は内側に折れる。

甕（第９図25　図版６）

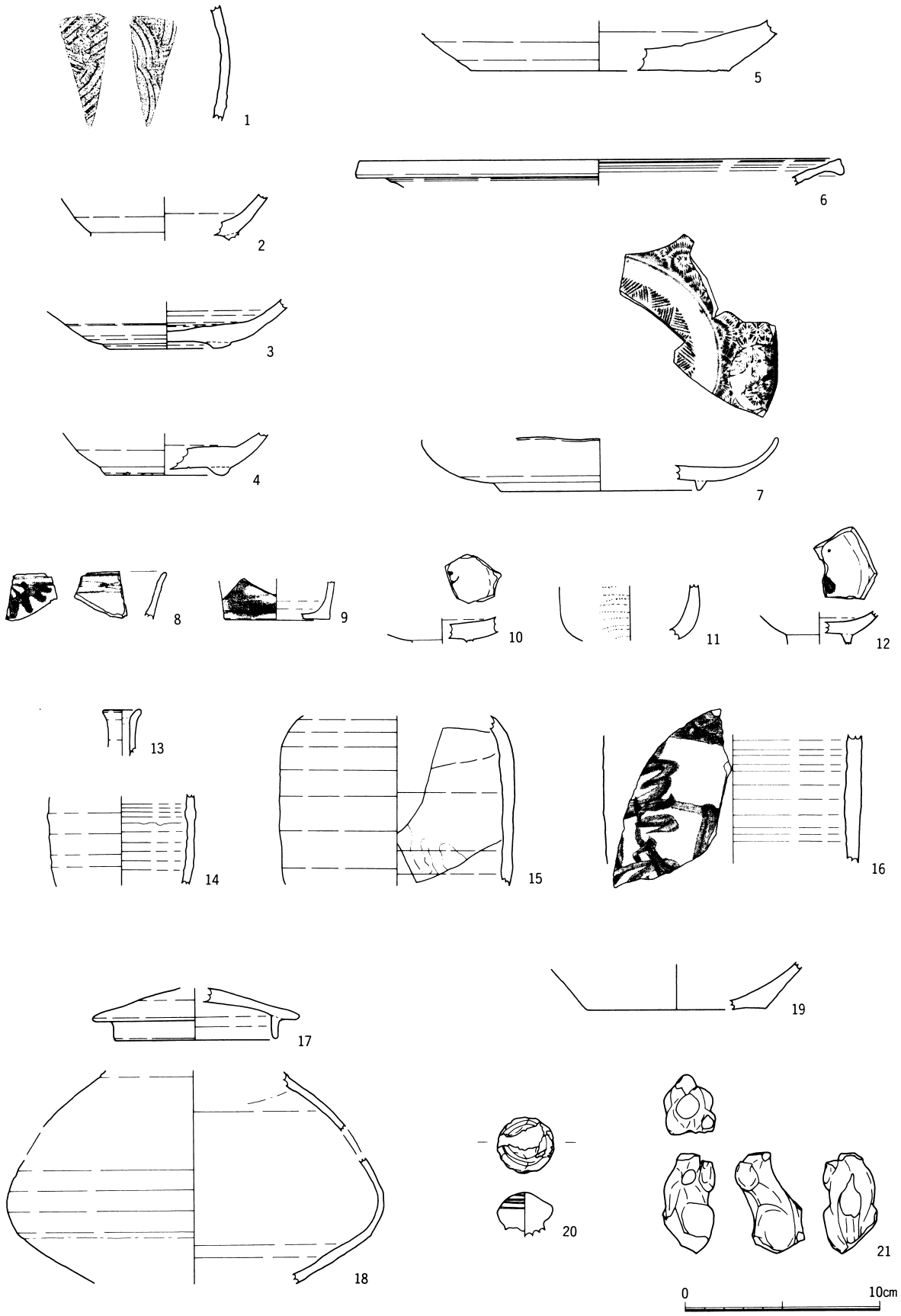
25は、口縁端部の断面形態が「Ｙ」字形で常滑の甕と思われる。

壺（第９図26　図版６）

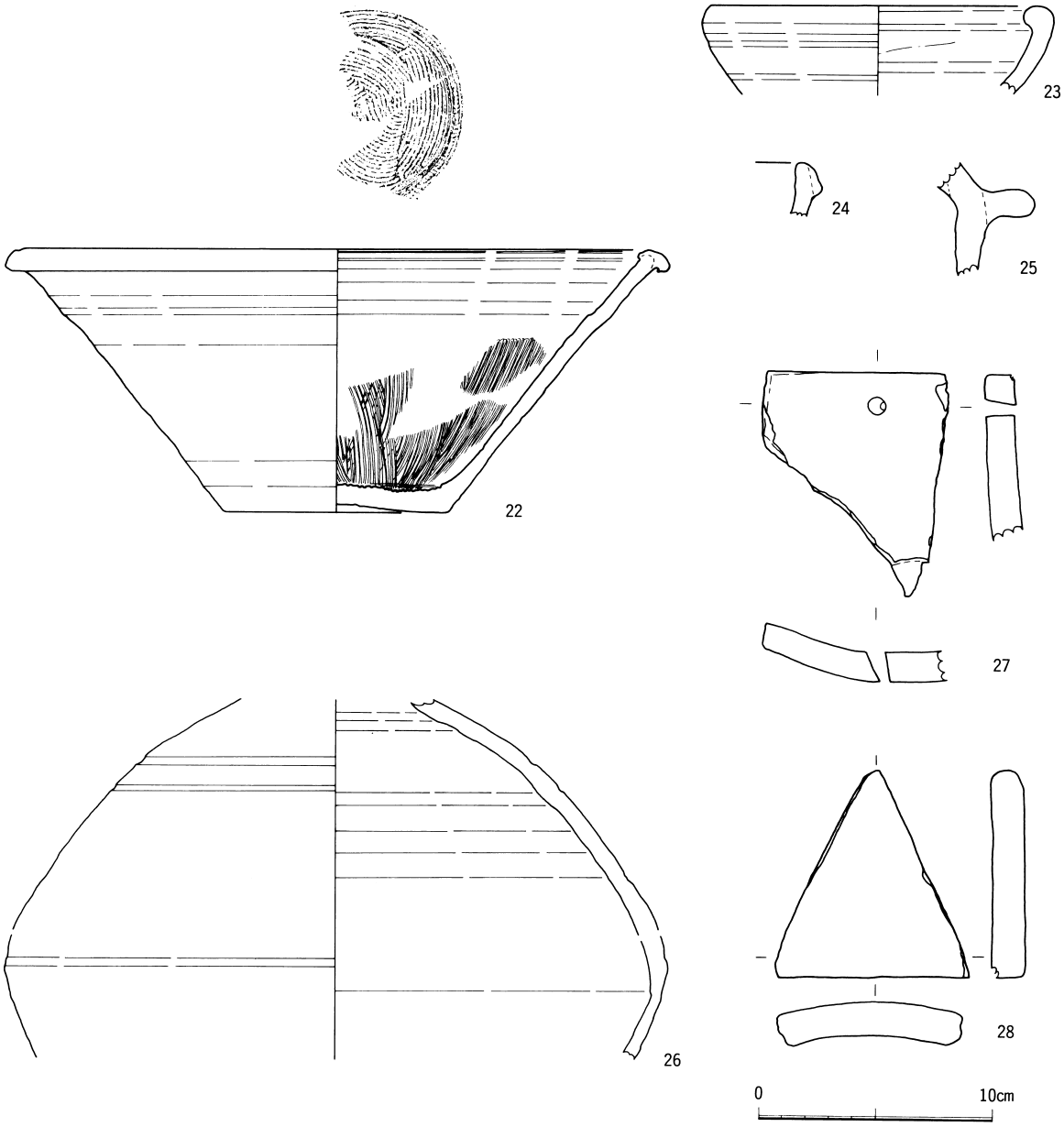
26は、長石粒を多量に含む胎土から信楽と思われる。算盤玉形で胴部上方はやや丸味を帯び、２本の沈線を有する。下方は直線的に開く。

瓦（第９図27～28　図版６）

27は、平瓦で焼成前に凹面から穴を開けている。28は両側面が加工されている。



第8図　出土遺物(1)（S＝1/3）



第９図　出土遺物(2)（Ｓ＝1/3）

第５表　その他の出土遺物集計表

器　種	個体数	総個体数(点)	総質量(ｇ)
碗類	口縁部２、底部１、不明３	6	19.8
皿類	底部２	2	5.2
湯呑	口縁部３、胴部２、底部１、高台１、不明１	8	17.9
徳利	胴部１、不明１	2	34.0
鉢	擂鉢口縁部１、鉢胴部３、不明２	6	119.2
甕	口縁部３、胴部13、不明11	27	1245.5
鍋	胴部６、取手２、不明２	10	71.1
壺	胴部２	2	37.1
瓦	不明８	8	723.3
不明	口縁部２、胴部１、不明１	4	34.8
合　　計		75	2307.9

第6表　遺物観察表

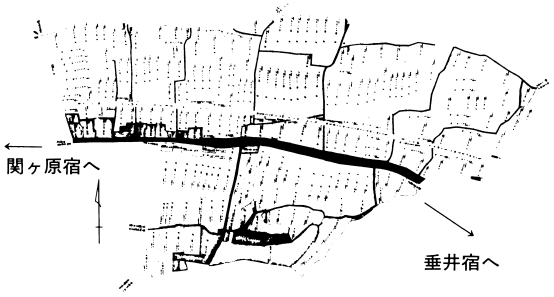
遺物番号	地区	層位	器種	質量(g)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形・調整	胎土	焼成	色調（1：外面・2：内面）	備　考	挿図番号
1	4 B	IId	須恵器甕	7.7				外面平行叩き、内面同心円状当て具痕	密、径3mm以下の長石を僅かに含む	良好	1：黄灰色(2.5Y6/1) 2：黄灰色(2.5Y6/1)		8
2	6 B	IId	山茶碗	10.6				内外面ともナデ	密、径0.5mm以下の長石を含む	普通	1：灰白色(2.5Y7/1) 2：灰白色(2.5Y7/1)	僅かに内面に自然釉が付着	8
3	4 B	IId	山茶碗	33.8		(6.5)		内外面ともナデ・高台端部に糸切痕	密、径0.5mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	1：灰白色(2.5Y7/1) 2：灰白色(2.5Y7/1)		8
4	5 B	IId	山茶碗	32.6		(6.4)		内外面ともナデ・高台端部に糸切痕	密、径0.5mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	1：灰白色(2.5Y7/1) 2：灰白色(2.5Y7/1)	内面に自然釉が付着	8
5	9 B	IIa	皿	67.2		(13.3)		回転ヘラ削り	密、径0.5mm以下の長石を含む	普通	1：灰黄色(2.5Y7/2) 2：灰黄色(2.5Y7/2)	古瀬戸大皿類の底部	8
6	9 B	IId	皿	16.8	(25.1)			回転ナデ	密、径0.5mm以下の長石、石英を幾つか含む。	良好	1：明オリーブ灰色(2.5GY7/1) 2：明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	灰釉	8
7	3 A	IIa	皿	48.8	(18.3)	(10.1)	(2.7)		密	良好	1：灰白色(N8/)	明治期の皿	8
8	3 A	IId	茶碗	3					密	良好	1：灰白色(N8/)	口縁部内面に呉須による列点雲文	8
9	3 A	IId	湯呑	5.1		(5.4)			密、石英を含む	良好	1：灰白色(N8/)	体部外面に呉須による文様	8
10	7 B	IId	湯呑	8.6					密、長石を僅かに含む	良好	1：明緑灰色(10GY8/1) 2：明緑灰色(10GY8/1)	底部内面に呉須による文様	8
11	8 B	IIa	湯呑	8.5				外面に回転体施文具により連続文様が施されている	密、1mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	1：黄褐色(10YR5/6) 2：緑色	外面に灰釉、内面に銅緑釉	8
12	4 B	IId	湯呑	10.8					密	良好	1：灰白色(7.5Y8/1) 2：灰白色(7.5Y8/1)	底部内面に呉須による文様	8
13	5 B	IIa	瓶	5.6	2.0				密	良好	1：明緑灰色(10GY8/1) 2：明緑灰色(10GY8/1)		8
14	5 B	IId	瓶	8.7				回転ナデ	密、径0.1mm以下の石英、金雲母を幾つか含む	良好	1：白色から緑系色 2：浅黄色(2.5Y7/4)		8
15	4 A	IId	徳利	48.9					密、径1mm以下の長石を僅かに含む	良好	1：灰白色(10Y7/1) 2：灰白色(10Y7/1)	胴部外面と内面上部に灰釉	8
16	8 B	IIa	徳利	56.7					密、径1mm以下の長石を僅かに含む	良好	1：灰白色(10Y7/1) 2：灰白色(10Y7/1)		8
17	3 A	IIIg	土瓶	32		(8.2)			密	良好	1：緑灰色(10GY6/1) 2：灰白色(2.5Y8/2)	天井部外面に銅緑釉	8
18	3 A	IIIg	土瓶	85.8				回転ヘラ削り	密、径0.1mm以下の長石、石英を多く含む	良好	1：緑色,黄灰色(2.5Y5/1) 2：灰白色(2.5Y8/2)	胴部外面上方に銅緑釉	8
19	6 B	IIIg	土瓶	15.2		(9.2)		回転ヘラ削り	密、径0.5mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	1：にぶい黄橙色(10YR6/4) 2：黒褐色(10YR2/2)	内面に鉄釉	8
20	6 B	IIa	つまみ	17.2				指圧痕	密	良好	1：淡黄色(2.5Y8/3) 2：淡黄色(2.5Y8/3)	全面に灰釉	8
21	7 B	IIa	玩具類	36.4					密	良好	1：灰白色(N8/)		8
22	3 A	IIIg	擂鉢	572.4				内面から口縁外部にかけて回転ナデ、外部下方は回転ヘラ削り	密、径0.5mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	1：暗赤褐色(2.5YR3/6) 2：暗赤褐色(5YR3/6)	擂り目は1単位23条、幅5cm。全面に錆釉	9
23	3 A	IIIg	鉢	46	(19.1)				径1mm以下の長石、石英を含む	良好	1：浅黄色(5Y7/3) 2：浅黄色(5Y7/3)灰白色(2.5Y8/2)	口縁部内面から外面に灰釉	9
24	6 B	IId	鉢	21.5					径3mm程の長石を僅かに含む	良好	1：浅黄色(5Y7/3) 2：浅黄色(5Y7/3)		9
25	4 B	IIa	甕	326.1				回転ナデ	やや粗、径5mm程の長石2個と径3mm程のチャート1個、石英、金雲母を多く含む	普通	1：橙色(5YR6/6) 2：にぶい橙色(5YR7/4)		9
26	3 A	IIIg	壺	973.6				回転ナデ	径4mm以下の長石、石英を多く含む	普通	1：褐色(7.5Y4/4) 2：灰白色(2.5Y7/1)		9
27	4 B	IIIg	瓦	233.4					径5mm以下の長石を幾つか含む	良好	1：暗灰色(N3/) 2：暗灰色(N3/)	凸面より凹面の径は大	9
28	6 B	IIa	瓦	232.3					やや粗、長石と砂石を僅かに含む	良好	1：暗灰色(N3/) 2：暗灰色(N3/)		9

※法量の(　)は推定値を含む

第4章　ま　と　め

本遺跡に隣接する南整理遺跡において、盛土状遺構が検出されているが、今回の調査でこの盛土状遺構と同じと思われる土層が道路北側にも残っていたことから、当時の中山道の道幅を探ることができる。『体系日本史叢書24　交通史』（豊田　武・児玉幸多編　1970）によると「大体道幅は弐間～三四間迄、左右並木敷地は九尺宛ニ而相当可致」とあり、南整理遺跡で報告された盛土状遺構の下面幅2.4～3.3mは史実に一致し、中山道の道路幅はこの盛土状遺構の間の6～6.5m、両側の盛土状遺構を含めると10～12.5mを有すると推定できる。(注1)

また、『関ヶ原町史　史料編二　近世二・現代』（1990　関ヶ原町編）には「野上村境より百間目一巾四間五尺　塩三郎前、同二百間目　一巾弐間五尺　但有形地、同三百間目　一巾三間三尺　安次郎前…」（中山道･北国街道道幅数取調書　明治七年）と記され、野上の村より垂井町の日守の一里塚にわたって道幅はしだいに広くなることがわかる。第10図は明治21年調べの野上村地籍図の一部である。これらによって盛土状遺構が中山道に伴うものであることが明らかになった。ただし、現代の側溝設置のために盛土状遺構と中山道との間が切られてしまっており、本来中山道が溝を伴うものであったかどうかについては確認することができなかった。



第10図　調査区周辺の地籍図

さらに、現在の舗装道路面でみる調査区西端と東端の比高は約1.5mであるが、調査した中山道の路面では約1.1mである。このことから野上宿への入口へは、現在より緩い登り坂であったことが推定できる。

なお、南整理遺跡において、今回の調査区にほぼ並行に道路状遺構1が検出されているが、中山道との関係については不明である。今回検出した中山道は街道の一部分であり今後の類例を待ちたいが、検出した硬化層から僅かながらその当時の中山道の様相をうかがうことができる。

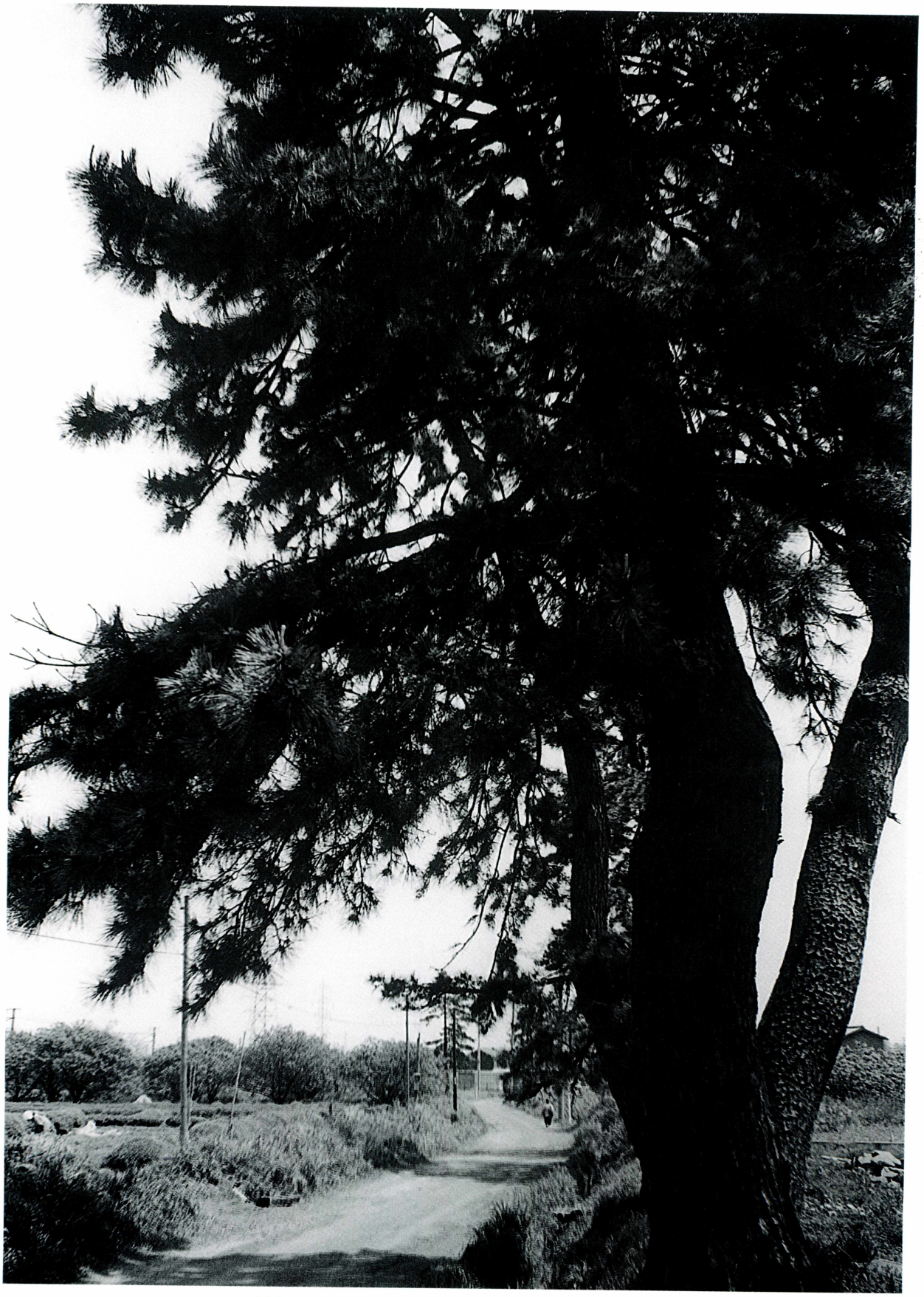
（注1）街道の道幅については垂井町文化財審議委員長太田三郎氏より助言を得た。

引用・参考文献

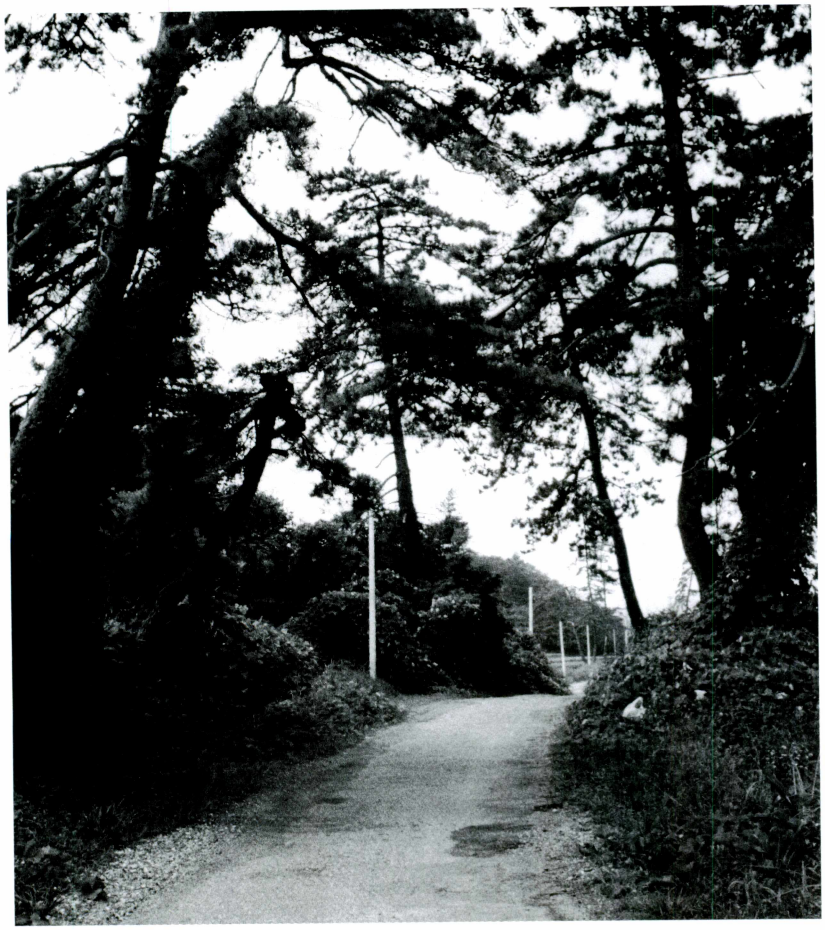
大熊喜邦　1979『東海道宿驛と其の本陣の研究』
太田三郎・安藤利道編　1997『中山道－美濃十六宿－』
小野木　学他　1995『下巾上遺跡』岐阜県文化財保護センター
木戸雅寿　1995「中世陶器－信楽－」『概説　中世の土器・陶磁器』
岐阜国道工事事務所編　1993『岐阜国道　二十年のあゆみ』
岐阜県土木部編　1992『岐阜県道路史』
鈴木隆雄　1984『中山道　冬の交通に関する一考察』
関ヶ原町編　1990『関ヶ原町史』通史編上巻
関ヶ原町編　1990『関ヶ原町史』史料編二　近世二・現代、史料編三　宿駅関係
豊田　武・児玉幸多編　1970『体系日本史叢書24』交通史
垂井町編　1996『新修垂井町史』通史編
松田　訓他　1995『名古屋城三の丸遺跡（V）』愛知県埋蔵文化財センター
波田野富信編　1982『中山道交通史料集一　御触書の部』
東　真一　1997『えびの市埋蔵文化財調査報告書』えびの市教育委員会
藤澤良裕　1987「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VI～VII　瀬戸市歴史民俗資料館
三輪晃三他　2000『南整理遺跡』岐阜県文化財保護センター

図　　版

図版０

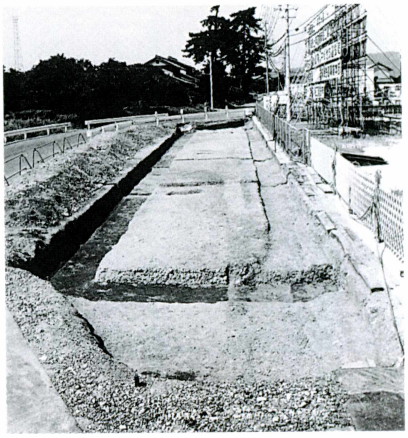


昭和35年当時の調査区風景（太田三郎氏　撮影）

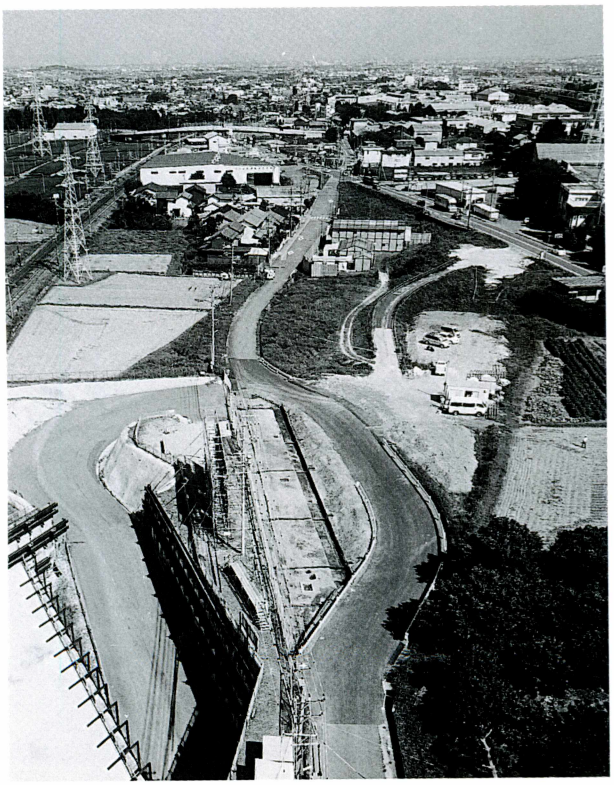


昭和35年当時の野上村松並木（太田三郎氏　撮影）

調査前風景（東から）



完掘状況（東から）



調査区遠景（西から）

調査区遠景（東から）

図版 2

調査区全景完掘状況

SK 1 平面検出状況

SK 1 半割状況

SK 2 平面検出状況

SK 2 半割状況

SK 3 平面検出状況

SK 3 半割状況

SK 4 平面検出状況

SK 4 半割状況

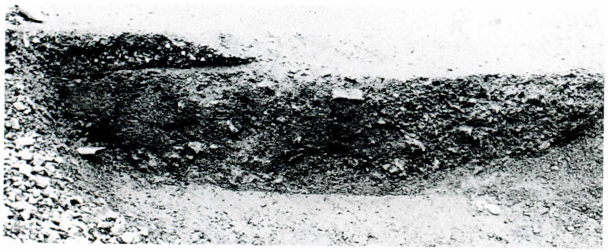
SK 5 平面検出状況

SK 5 半割状況

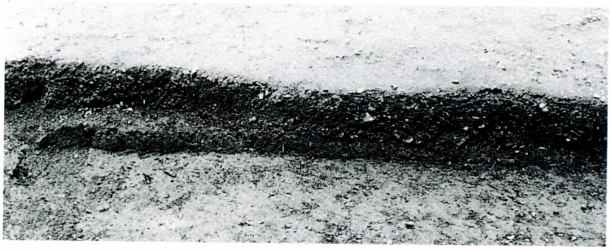
遺物出土状況

遺物出土状況

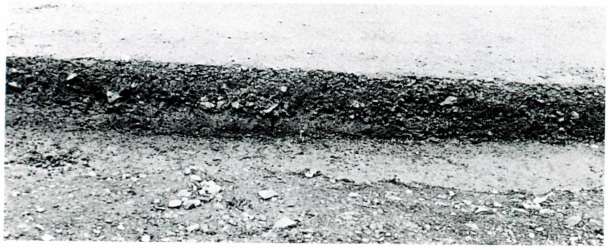
図版 4



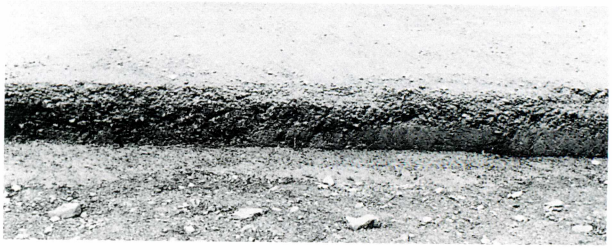
3－4 g



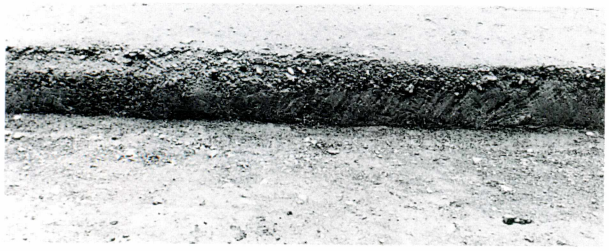
3－4 g



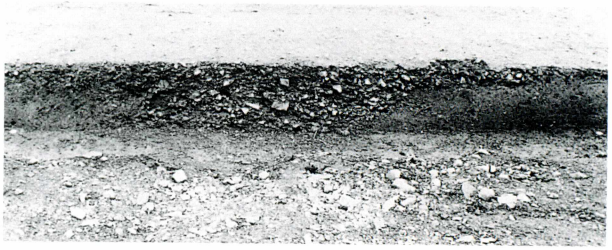
4－5 g



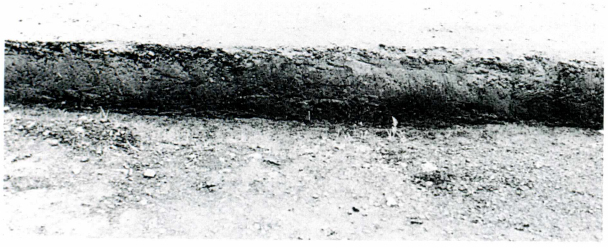
4－5 g



5－6 g

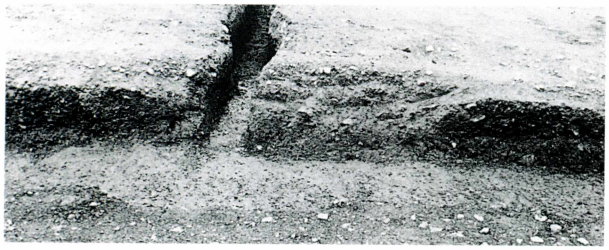


5－6 g

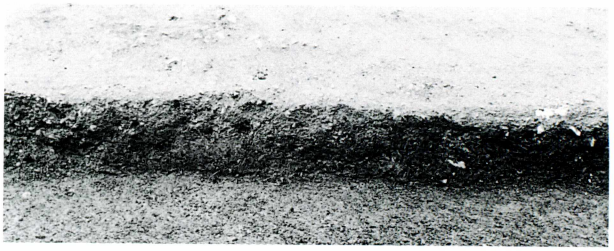


6－7 g

6－7 g



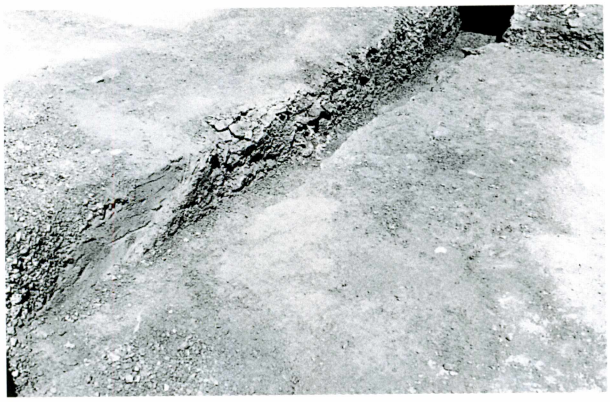
7－8 g



8－9 g

8－9 g

9 g

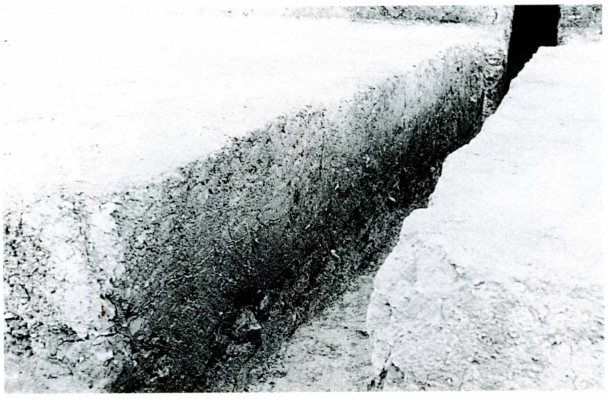


a—a'　道路土層断面

b—b'　道路土層断面

c—c'　道路土層断面

c—c'　砂質層断面



d—d'　道路土層断面

e—e'　道路土層断面

e—e'　盛土状遺構下部土層断面

f—f'　道路土層断面

図版 6

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかせんどう
書名	**中山道**（不破郡関ヶ原町大字野上字北整理地点の調査）
副書名	
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第67集
編著者名	浅野哲男
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東１-26-１　Tel058(237)8550
発行年月日	西暦2001年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかせんどう 中山道	ぎふけんふわぐん 岐阜県不破郡 せきがはら 関ヶ原町大字 のがみきたせいり 野上字北整理	21362	08904	35° 22′ 05″	136° 30′ 30″	20000717 ～ 20000922	300m²	一般国道21号関ヶ原バイパス建設事業に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中山道	街道跡	近世		中世陶器 近世陶磁器	近世中山道の硬化面

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第67集

中　山　道

（不破郡関ヶ原町大字野上字北整理地点の調査）

2001年３月23日

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東１-26-１

印　　刷　西　濃　印　刷　株　式　会　社